

---

## 学生による授業評価

国 広 哲 弥

私が今年度担当した授業の中に「英語学演習Ⅴ」というのがあり、テキストとしてR. L. Trask, *Language: the Basics* (second edition, 1999, Routledge)を用いた。今年度で定年になるので、神大在職の締めくくりとして、その最後の授業の時に学生に私の授業の評価をしてもらった。もちろん無記名である。今までの風評では私は厳しい先生ということになっているらしいので、どのような拒否的な反応が出るかなかなか覚悟していたのであるが、結果として、大多数の学生が満足してくれていることが分かり、ほっと胸をなで下ろしている。一般に学生による授業評価が歓迎されないのは、マイナスの評価を恐れてのことであると思われるが、案外そうでもないようである。私に対する評価の内容を記すことは、ほかの先生方のご参考になる面があると思うので、自慢に響くのを顧みずに述べてみる。

まずテキストはとても面白かったという学生が多かった。この初版を実は数年前に別の授業で使ってみて、私自身とても気に入っていたのである。別の大学でも使ったが、やはり好評であった。言語学入門の一つであるが、核心的な部分を分かりやすく、かつ興味深く説いていて、類書の中では出色のものであると思う。特に手話の最近の研究に基づいて人間の言語能力は遺伝的に持って生ま

れたものであることを説得的に説いている「子供と言語」の章は圧巻である。

私の授業の仕方は厳しくはあったが、最後になってみるとお陰で実力が付いてよく読めるようになり、感謝しているという評が多かった、自慢げに響くのを厭わずに言うと、大学に来て私のような授業に出会ったのは初めてであり、同じような授業をする先生は神大にはほかに一人もいらっしやらないという。それでそれがどういう授業であったのか、ご参考のために記してみたい。

まず学期初めに受講生のリストを作って配布する。このリスト順に指名して音読して訳させる。学生は指名順があらかじめ分かっているのはとても有難いことであったと言う。学生が訳したあと、私がもう一度説明を加えながら訳し直す。この時、学生の不適切な訳を一つ一つ取り上げて直して行くという方法を取る。これが学生には好評であった。これでとてもよく理解できたと言う。その時に誤訳と適訳の意味のずれを詳しく説明する。例えば、英語では同じく‘young’でも「若い」は大人にしか使えず、子供には「幼い」を使わなければならないといった類である。

学生の「先生が定年で去って行かれるのは残念です」という言葉を読んで、私のささやかな労も報いられたと感慨ひとしおである。